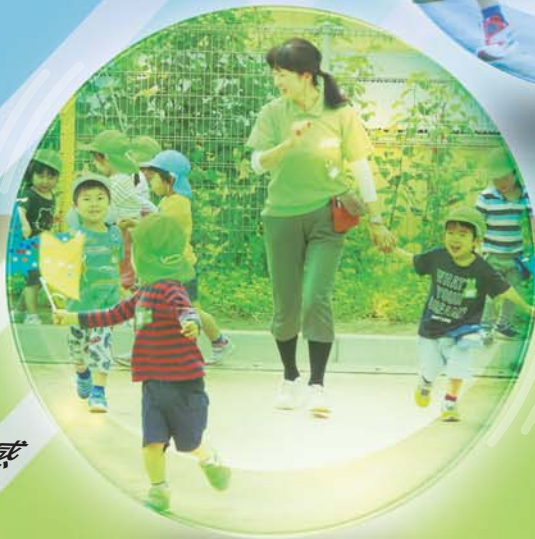


研究指定 子どもの発達や学びの連続性を踏まえた
課題 就学前教育の質の向上

研究主題 **心と体が弾む**
～運動遊びを通して～



5歳児

4歳児

3歳児

新しい動き
新しい動き
感じて動き

挨拶

杉並区教育委員会教育長 井出 隆安

幼児期は、運動機能が急速に発達し、いろいろなことをやってみようとする活動意欲も高まる時期です。しかし、社会環境や人々の生活様式の大きな変化から、現代の幼児は体を動かして遊ぶ機会が少なくなり、遊びを中心とした身体活動を生活全体の中に確保していくことが大きな課題となっています。今回の幼稚園教育要領の改訂では「幼児期運動指針」（平成24年3月文部科学省）などを踏まえて、園生活の中で多様な動きを経験することの大切さが示されています。

本園では、園生活の中で繰り広げられている幼児の運動遊びについて、動きの「質の深まり」と人との「関係の広がり」の視点から見直し、幼児がより主体的に、より活発に動けるための、保育者の援助と環境の在り方について研究を進めてまいりました。本研究の成果が、多くの就学前教育施設の教育・保育に生かされ、子どもたちの豊かな心や健やかな体の育成につながることを願っています。

はじめに

杉並区立下高井戸子供園長 齊藤 志乃

本園は、昭和45年に杉並区立下高井戸幼稚園として開園し、平成22年に杉並区型幼保一体化施設として杉並区立下高井戸子供園に転換しました。

杉並区立幼稚園・子供園として50年近くにわたり、この地域の幼児教育に携わり、たくさん子どもたちと園生活や園での文化を積み重ねてきました。そこに園舎改築となり新たに環境の見直しをする貴重な機会となりました。

この度、杉並区教育委員会教育課題研究指定を受け、さらなる就学前教育の充実を目指し、この真新しい園舎・園庭の中で、運動遊びを通して、幼児が心と体を弾ませ、自ら繰り返し取り組みたいような援助や環境の在り方を明らかにし、教育・保育の質の向上を図っているところです。

この研究を進めるにあたり、いつも温かく示唆に富んだご指導を賜りました、共立女子大学教授 田代幸代先生、そして、貴重な研究の機会を与您えくださった杉並区教育委員会の皆様に心より感謝申し上げます。

心と体が弾む ～運動遊びを通して～

幼児期は運動の幅広い基盤を形成する時期であり、すすんで体を動かして遊ぶ幼児を育てることは重要である。本研究では幼稚園の生活の中での運動遊びの場面から、幼児が自分のやりたいことに向かって心と体を十分に動かせるための援助と環境の在り方について探り実践することで、質の高い幼児教育を目指す。

研究の内容

1 運動遊びを通して幼児が何を体験しているのかを読み取る

↑ 質の深まり

「感じて動く」
「多様に動く」
「考えて動く」
を視点に、幼児の
経験内容を読み取る。

↔ 関係の広がり

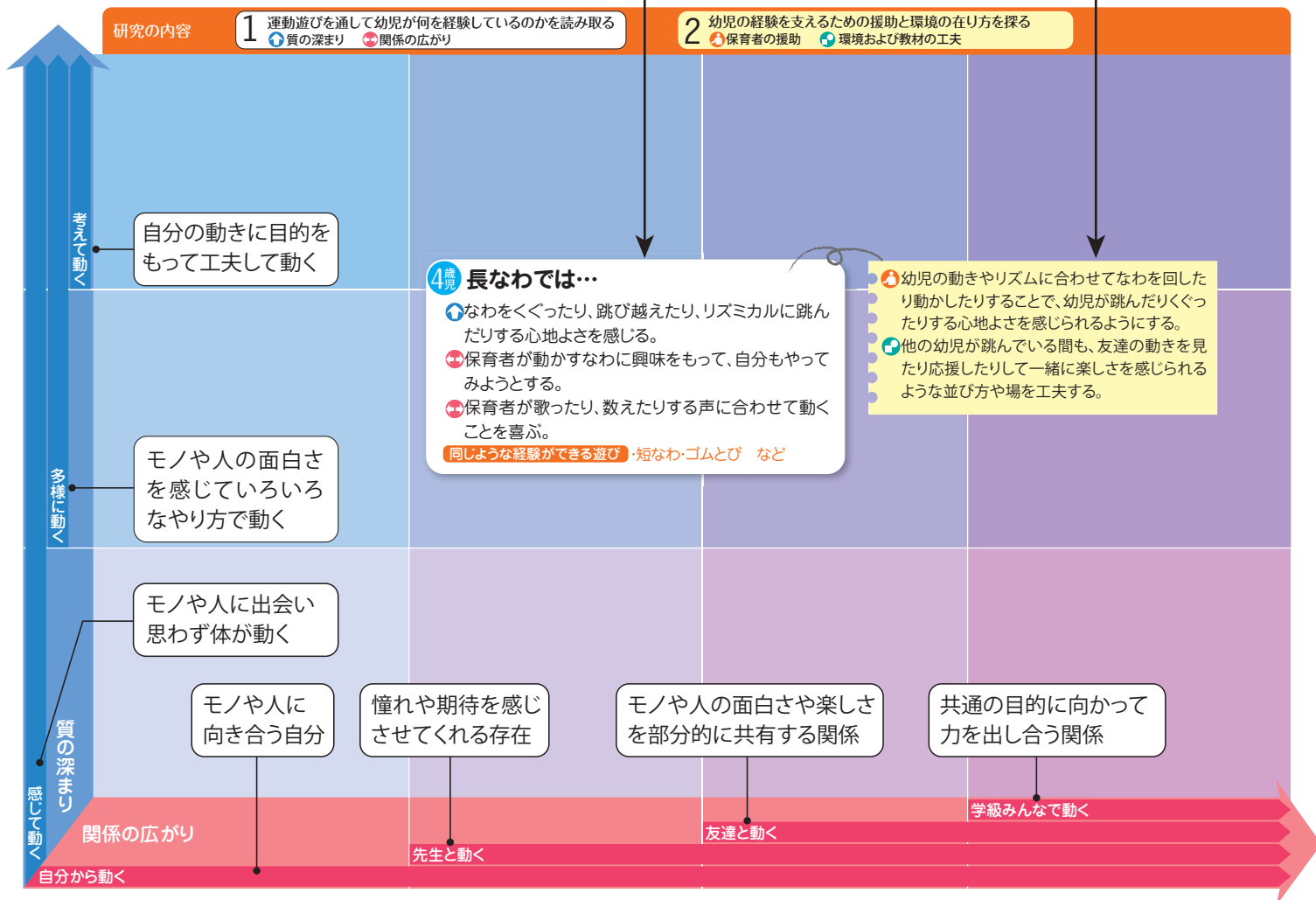
「自分から」
「先生と」「友達と」
「学級みんなで」
を視点に、幼児の
経験内容を読み取る。

2 幼児の経験を支えるための援助と環境の在り方を探る

👤「援助」と🏠「環境の構成(教材)」

- ・幼児の経験を支え、より豊かにするための援助と環境の在り方を考察する。
- ・運動遊びで味わえる魅力や楽しさを把握し、教材や活動の理解を深める。

『質の深まり』と『関係の広がり』に対応した位置に記す。



保育者の願い

- ・体を動かす楽しさを十分に味わってほしい
- ・友達や保育者との関わりを楽しんでほしい
- ・初めてのことや苦手なことも乗り越えてほしい



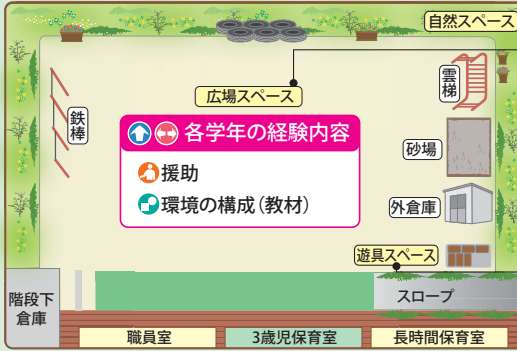
事例検討

3 全学年の共通の遊びの場としての園庭環境の在り方を考える

視覚的な指導計画としての園庭マップ

幼児にとって戸外に出て遊ぶことは運動遊びや自然物との出会いの機会となり、全学年の遊びや幼児が交差することによる学びも生じる貴重な機会となる。園庭を全学年の共有の遊び環境として考察し、視覚的な指導計画を「園庭マップⅠ～Ⅴ期」として表す。

■基本となる園庭マップ



Ⅰ～Ⅴ期の園庭マップには、各スペースでの遊びや活動の内容、

広場スペースでの運動遊びの経験内容：↑ ↓ ↻ 援助：👤 環境の構成：🌿 を示す。

基本的な園庭の空間(スペース)の意味付け

幼児が思い切り体を動かして遊べる広いスペース

広場スペースの調整

※全学年共有の遊び環境として、有効に活用するために、必要な援助や調整を図る

四季折々に変化する自然への感動や不思議さを感じられるスペース

可動遊具が身近にあり、幼児自身が遊具を出し入れしながら遊びの場をつくれるスペース

園庭マップ

園庭環境の在り方を考察する。
(本リーフレットにはⅢ期のみ掲載)

- Ⅰ期 4～5月
- Ⅱ期 6～7月
- Ⅲ期 9～10月
- Ⅳ期 11～12月
- Ⅴ期 1～3月

広場スペース

それぞれの学年が、思い切り体を動かし、自分の力を発揮していく。
・走る、投げる、引く等の多様な動きが体験できる遊びをする。

広場スペースの調整

- ※全学年が伸び伸びと運動遊びを展開できるように、園庭の場を分けたり、学年で使う時間を調整したりする。
- ※園庭にラインを引いておき、リレーやかけっこをしたくなるような環境を構成する。
- ※運動会に向かって各学年が使用する遊具や用具は、幼児が取り出しやすいように表示や置き方を工夫し、いつでも遊びに使えるようにする。

自然スペース

- 夏から秋への自然の変化に気付く。
・草花で色水遊びをする。
(アサガオ・マリゴールド・シソ等)
・草花の種のいろいろな形や大きさに気付く。
(フウセンカズラ・ヒマワリ・オシロイバナ等)
・秋の種まき、苗作りや春咲きの球根植えをする。(ダイコン・コマツナ・カブ・チューリップ等)
・虫を見付けたり飼ったりする。
(バッタ・コオロギ等)

遊具スペース

- 遊具を組み合わせる場をつくり、同じ場にいる友達との関わりを楽しむ。
・運動会の取組みにつながる遊びをする。(リズム表現の役になりきったごっこ遊び等)
・ゆったりとした雰囲気の中で、安心して過ごして遊ぶ。(砂場[3歳児は保育室前を活用]・固定遊具等)

園庭マップの一部掲載

(研究発表会場に園庭マップ詳細を掲示)



鬼ごっこ(オオカミとこぶた)

場のつくり方や保育者の援助を見直し、工夫することによって、幼児が思い切り走ることを楽しんだ事例

幼児の実態

- ① 鬼ごっこでは保育者に追いかけられながら走ることを楽しんできたが、鬼に捕まるのがいやで陣地の中で立っている幼児や遊びに参加しつけない幼児も見られた。
- ② どの幼児も安心して鬼ごっこに参加し、走る楽しさを感じてほしいと願い、園庭の横幅いっぱいの大きな長方形の2ヶ所の陣地を近距離に設定し、学級のみんなで鬼ごっこを行った。オオカミ役の保育者がお面をかぶり、「フーフーのフー」と言いながら、こぶたの家を吹き飛ばす仕草をすると、こぶた役の幼児

は急いで陣地から走り出し、もう一つの陣地へ走り込むことを楽しんだ。

- ③ 学級全員が入っても余裕のある広い陣地が近距離にあることで、幼児は安心して陣地の行き来をしていたが、オオカミに捕まるスリル感が減り、動きは緩慢になっていった。



保育者の願い

逃げたり追いかけたりすることに夢中になって、思い切り走る楽しさを感じてほしい。

援助と環境の工夫

- ④ 園庭の対角線上に陣地を設定して走る距離を長くとったり、いろいろな方向に走れるように陣地の数を増やしたりして、走る楽しさを感じられるようにする。
- ⑤ 二人の保育者はオオカミ役とこぶた役に分かれ、追いかけたり

追われたりする動きをする。こぶた役になった保育者は、なかなか動き出せない幼児に寄り添いながら「今だ、引越そう」と走り出すタイミングを言葉に表し、幼児と一緒に動いていく。

実践してみよう

- ① 陣地の広さや距離を変えたことで、「追う」「追われる」という鬼遊びのスリルを十分に感じられた。また、捕まらないように急いで逃げる、身をかわすなどの動きが引き出され、思い切り走ったという満足感が味わえた。
- ② 陣地が狭くなったことで、陣地の中でたまたま隣り合わせた友達と、「食べられなかったね」「ドキドキしたね」と顔を見合わせるなど、一緒に遊んでいる楽しさを感じることに繋がった。

- ③ 鬼が怖くて陣地を出られなかった幼児は、こぶた役の保育者が繰り返し一緒に逃げたり声を掛けたりしたことであらゆる陣地から出られるようになり、思い切り走る楽しさを感じられた。
- ④ 陣地の大きさや場を工夫することで思い切り走ることや、「3びきのこぶた」のオオカミとこぶたになって逃げたり追いかけたりすることを楽しみながら、鬼ごっこの楽しさが味わえるようになっていく。



巧技台 保育者が設定した遊具に興味をもち、自分から関わって楽しんだ事例

幼児の実態

- ① 幼児が園生活に慣れてきた頃、新しい遊具にも安心して取り組めるように巧技台を使って一本橋を設定しておく、「何だろう」「やってみよう」と幼児が感じて渡り始める。その様子を見ている幼児もいて、巧技台や他児の動きに興味をもつ様子が見られる。
- ② 這う動きからネコになったつもりになり「にゃあ」と言いながら渡り始める幼児もいる。

保育者の願い

モノや周りの幼児の動きを感じて、自分なりに動くことを楽しんでほしい。

援助と環境の工夫

- ③ 保育者が幼児の動きを「シュー」「ピョーン」などの擬態語や擬音語で表し、言葉を添えることで、動いている幼児が保育者に見守られている安心感をもって取り組めるようにする。また、周りの幼児がその動

きに関心をもてるようにする。

- ④ 巧技台を数日間、同じように設定することで、幼児がやりたい時に繰り返し取り組んだり、違う動きを見付けたりできるようにする。

実践してみよう

- ① 数日にわたって同じ場に巧技台を設定したことで「またやりたい」「もう一回やってみよう」という幼児の安心感や意欲につながった。
- ② 初めは側で見ていた幼児も、他の幼児の様子を見てやり方や動き方が分かり、自分からモノに関わって遊ぶ楽しさを感じていた。

- ③ 「今度は何だろう」「またやってみよう」というさらなる意欲や多様な動きを誘発できるように、巧技台の組み合わせ方を変化させたり、幼児が待つことなくすぐに動き出せるように場を広げたりするなど環境の再構成を工夫していく。



考えて動く

- ① 幼児なりのイメージや遊びの中で楽しんでいることを受け止め、保育者が言葉に表すことで、幼児が見守られていると感じたり、他の幼児の動きに興味をもったりできるようにする。
- ② 幼児の実態に合わせて、設定の仕方を変えていき、幼児が興味をもって取り組めるようにする。

- ① 幼児が繰り返し取り組む中でコツをつかめるよう、友達のよい動きを擬態語や擬音語で表現したり、幼児同士が気付きを伝え合ったりする機会や雰囲気を作る。
- ② 幼児の技能を把握し、少し頑張ればできるような動きを提案したり、安全に取り組める環境を工夫したりする。

4歳 巧技台(一本橋やはしごなどを組み合わせる)では…

- ① 巧技台の場や参加する他の幼児や保育者の動きに興味をもち、「やってみよう」「こうしたら面白そう」など感じて自分から関わる中で、渡る・這う・よじ登る・飛び下りる・バランスをとるなどの動きを楽しむ。



同じような経験ができる遊び ・ゴムとび・ゴムくぐり など

- ① 幼児の動きやリズムに合わせてなわを回したり動かしたりすることで、幼児が跳んだりくぐったりする心地よさを感じられるようにする。
- ② 他の幼児が跳んでいる間も、友達の動きを見たり応援したりして一緒に楽しさを感じられるような並び方や場を工夫する。

4歳 長なわでは…

- ① なわをくぐったり、跳び越えたり、リズムカルに跳んだりする心地よさを感じる。
- ② 保育者が動かすなわに興味をもって、自分もやってみようとする。
- ③ 保育者が歌ったり、数えたりする声に合わせて動くことを喜ぶ。

同じような経験ができる遊び ・短なわ・ゴムとび など

多様に動く

- ① ボールに触れる面白さに共感しながら、幼児が多様な動きに気付けるように言葉をかけたり動いたりしていく。

- ② 幼児がボールに触れる楽しさを感じられるように、柔らかいボールを個々に用意したり、遠くまで転がりにくいような場を選択したりする。

- ① 保育者は幼児の動きを「ピョン」「シュー」などの擬態語や擬音語で表現し、幼児が動きの面白さを感じながら遊びたくなるようにする。

- ② 自分なりに巧技台の場に関わって遊ぶ楽しさを感じられるように、幼児の目につきやすく、繰り返し遊べる場を設定する。

3歳 ボールに触れる遊びでは…

- ① ボールが転がったり弾んだりする動きに面白さを感じ、思わずボールを追う、つかむ・転がす・投げる・バウンドさせるなどの動きをする。
- ② 自分のボールを転がしたりつかんだりしながら、保育者や他の幼児と一緒に動く楽しさを感じる。



同じような経験ができる遊び ・風船つき・玉入れ など

4歳 鬼ごっこ(オオカミとこぶた)では…

- ① 「3びきのこぶた」のお話しに登場するオオカミとこぶたになったつもりで逃げたり追いかけたりする中で、陣地に向かってまっすぐに走ったり、方向を変えて走ったり、止まったりする動きを楽しむ。
- ② 保育者や友達と一緒に動く楽しさを感じる。

同じような経験ができる遊び ・むっくrikマさん・引越し鬼・助け鬼・しっぽとり・ネコとネズミ など

3歳 追いかっこでは…

- ① 親しみを感じている保育者を追いかけたり、保育者に追いかけられたりして、周りの幼児と一緒に走る楽しさを感じる。



質の深まり

関係の広がり

感じて動く

自分から動く

先生と動く

2 幼児の経験を支えるための援助と環境の在り方を探る

👤 保育者の援助 🌐 環境および教材の工夫

5歳児 鉄棒では…

- 👉 鉄棒を握って支持し、ぶら下がる、揺れる、逆さまになる、回転する、体のバランスをとるなどの動きを楽しむ。
- 👉 自分の目的に向かい、友達と励まし合ったり、刺激し合ったりして取り組み、充実感を味わう。
- 👉 魅力的な動きに憧れ、友達と一緒に試行錯誤しながら動いてみようとする。

👉 同じような経験ができる遊び

・竹馬・なわとび・巧技台・マット・固定遊具 など



4歳児 円形ドッジボールでは…

- 👉 「ボールに当たらないように逃げる」という思いで身をかわしたり、ボールを見ながら前後左右に素早く移動したりする。
- 👉 「ボールを当てたい」という思いでボールをとったり投げたり転がしたりする。
- 👉 幼児は「当てられなかったね」「当てたいね」などを友達に伝えながら一緒に遊び、ルールがあることで遊びが楽しくなることを感じる。

👉 同じような経験ができる遊び

・転がしドッジボール など



5歳児 三つ巴鬼では…

- 👉 チームの共通の目的に向かって相手を捕まえたり、友達を助けたりするために、素早く走り抜ける、陣地に駆け込む、止まる、急に方向を変えて走る、そっと近づく、身をかわすなどして動き、互いに力を発揮し合うことを喜ぶ。
- 👉 楽しくなる遊び方やルールを友達と一緒に考え、自分たちで遊びを進める喜びを感じる。

👉 同じような経験ができる遊び

・しっぽ取り・開戦どん・リレー など

- 👉 ルールを守ることで遊びが楽しくなったり、友達と考えや思いを伝え合うことで一緒に遊びを進める喜びを感じたりできるように、機会をとらえて援助したり見守ったりしていく。
- 👉 幼児が自分たちで遊具や用具、遊び場を準備できるように、遊具の置き場所や置き方を工夫する。(ボール、ラインカー、カラーコーン、表示、カラー帽子、リング状パトンなど)

5歳児 ドッジボールでは…

- 👉 チームの共通の目的に向かって、ボールを投げたり、捕ったり、捨てたり、身をかわしてボールをよけたりして動き、大勢で遊ぶ面白さを感じる。
- 👉 チームで競い合う面白さを友達と共有し、一緒に動きや作戦を考え合う。
- 👉 楽しくなる遊び方やルールを考える。自分たちの動きや参加人数によって遊びの場の取り方やチーム分けを工夫する。



- 👉 保育者も一緒に動きながら、幼児が遊び方や動き方に気付けるようにしていく。
- 👉 人数やボールを操作する力に応じて場の広さを工夫する。
- 👉 時にはボールの空気を抜いて、つかみやすくしたり、遠くまで転がり過ぎたりしないようにし、遊びが素早く展開することで幼児が楽しめるようにする。

- 👉 幼児がイメージしやすい動物になりきることで、追いかける・逃げるなどの動きを引き出す。
- 👉 リズミカルな合図を唱えたり歌ったりすることで動きのきっかけをつかめるようにし、遊びが活性化するようにする。
- 👉 こぶたの家(陣地)などはラインやマット、表示などで分かりやすく示す。

- 👉 保育者は、幼児が思わず走り出したくなるように「速いな。待て待て～」と声を掛けながら走る。
- 👉 広い空間で、保育者は幼児の動きに合わせて走る。

学級みんなで動く

友達と動く

10月

保育者の提案で始めた遊びが、幼児の必要感から遊び方を変え、動きの満足感が得られた事例

幼児の実態

- ① 保育者が導入したルール(2チームに分かれる、ボールに当たると外野に出る、残らず当てたチームの勝ち)は、幼児に分かりやすく、ボールを相手に当てること、ボールに当たらないように身をかわすことを楽しんでた。
- ② 友達と誘い合って繰り返し遊び、ドッジボールの楽しさを感じているが、ボールに当たって外野に出る人数が増えると、ボールの取り合いが増えたりボールに触れられずにしゃがみ込んだりする姿も見られた。

保育者の願い

遊び方を工夫することでスリル感を増やし、遊びを楽しめるようになってほしい。

援助と環境の工夫

- ① ボールに触る機会が増えるように場を複数に分ける。
- ② 「もっと投げたい」「すぐにとつまらない」などの幼児の思いを保育者が受け止めながら、学級全体で共有する。
- ③ 投げたりかわしたりする動きの満足感を味わえるようにするために、保育者も遊びの仲間に入りながら、幼児の考えと一緒に試したり、気づきのきっかけを作ったりしていく。



実践してみても

- ① コートが複数になることで、ボールに触る機会が増えたが、逃げるスリル感は変わらなかった。
- ② 「もっと投げたい」「当たるとつまらない」という幼児の気持ちを学級全体で共有すると、中当ての先行経験から「内野に戻るルールの追加」が幼児から提案された。どうすればよいのかが分からない幼児には、保育者が遊びの仲間に入りながら「外野の○さんが当てた」と言葉で表し、友達同士で「○さん。中に入れるね。よかったね」と声を掛けるきっかけを作っていた。幼児同士で声を掛け合えるようになっていったことで、投げたり逃げたりする動きが活発になり、幼児が新たな遊び方のドッジボールを楽しめるようになった。
- ③ 内野と外野の出入りがあることで、投げたり逃げたりする機会が増え、動きの満足感を味わうことができた。
- ④ 外野に出た後も「もう一回当てるぞ」「次は当たらないぞ」と相手を意識して動くようになった。また「○さんを当てるぞ」と友達を意識して動く姿も出てきた。

11月

12月



1月

友達を意識することで、自分の動きも変化し、学級全体で楽しめる充実感につながっていった事例

幼児の実態

- ① 新たな遊び方(外野が相手チームにボールを当てると内野に戻れる)で、自分たちで遊びを繰り返し楽しんでいった。内野と外野を行ったり来たりしながら、ねらったところにボールを投げたりボールを捕ったり止めたり、ボールをかわしたりすることを楽しんでいる。
- ② 友達のよい動きを見付けたり、友達の動きを見て自分のことのように一緒に喜んでたりする姿が見られ、友達とのつながりを感じている。

保育者の願い

友達とのつながりを感じながらドッジボールに取り組み、自分の力を発揮する充実感を味わってほしい。

援助と環境の工夫

- ① 保育者も仲間の一員になって遊び、ゲームの楽しさに共感しながら、学級のみんで遊ぶ充実感を味わえるようにする。
- ② チームの人数やコートの広さを同じにする必要性に気づき、自分たちで相談したり調整したりしてドッジボールを始められるよう時間や場所を確保する。



実践してみても

- ① これまでも互いに考えを出し合っていたが、自分や友達、周囲の動きを振り返ることで、「ボールをとったらすぐ投げよう」「ボールに当たらないように離れて逃げよう」など、友達と声を掛け合い、素早くボールを投げたり、捕ったり、かわしたりするなど、十分に体を動かす楽しさを感じている。
- ② 友達のよさを感じながら自分の力を発揮していくことで、学級のみんなのつながりや競い合う面白さを感じ、充実感を味わっている。



2月

3月

ICTの活用

●ICTの効果 ◇幼児の変化

～心と体が弾む手掛かりとして～

タブレット端末を介して、運動遊びに取り組む自分たちの映像を見る

●自分への気付き、友達への気付き、学級全体への気付きとなる。

◇客観的に見ることで「こう動いていたのか」「次はこうしてみよう」と考えながら動く。

◇友達によさやみんなで動く楽しさに意識が向き、周りの人や状況に応じた動きに気付く。

●学級のみんなで見ることで、共通の話題にしやすい。

◇映像を手掛かりに自分の考えを言葉で伝える。

◇「みんなでやったからできた」「次はこうしてみよう」と体験で得られたものを友達と共有し、見通しをもって取り組む。

保護者との連携

◎「幼児期運動指針」をもとに、幼児期に運動遊びをする大切さを、園だよりや保育参加などで提案。

・多様な動きが含まれる遊びを取り入れましょう。

・楽しく体を動かす時間をつくりましょう。

・安全に楽しく遊ぶことができる環境をつくりましょう。

◇子供園からの提案を受けて、親子で体を動かして遊びながら子どもの成長を実感する保護者や、登降園時の自転車利用から徒歩へと変化する保護者の姿が見られる。



研究のまとめ

◎「質の深まり」と「関係の広がり」を視点に幼児の経験を読み取り、幼児が主体的に運動遊びに取り組めるための援助と環境の在り方を工夫することは、心と体を十分に働かせて楽しむ幼児の育成につながる事が分かった。保育者は身体感覚や運動感覚などを培う視点をもって、幼児に関わることが大切である。



1 「質の深まり」と「関係の広がり」から読み取った幼児の経験

3歳:モノや人に出会い「何だろう」「面白そう」と感じて、思わず自分から体が動いていく。また、保育者に見守られ、安心して動いていく。

4歳:面白さや楽しさを共有する保育者や友達の存在があることで、友達と一緒にいろいろなやり方で動いていく。

5歳:自分のめあてに向かって黙々と取り組む姿や、友達や学級のみんなと共通の目的に向かって考えや力を出し合って動いていく。

2 経験を支えるための援助と環境の在り方

●幼児が興味・関心をもって運動遊びに取り組めるように、モノや教材との出会わせ方や、繰り返し遊べる時間や場の作り方を工夫する。

●幼児がいろいろな動きや遊び方に気付けるように援助する。

●幼児が遊びながら、友達と考えたり進めたりする楽しさや充実感を味わえるように、発達に応じた援助を工夫する。

3 園庭マップ

園庭マップを作成し、基本的な園庭の空間(スペース)の意味付けをしたことで、組織的かつ計画的に環境を整え、遊びの充実を図ることができた。

◎子どもの発達や学びの連続性を踏まえた幼児期の教育の充実。

●幼児期の遊びの中で「質の深まり」「関係の広がり」のある経験を積み重ね、高めていくことは、小学校教育の「運動遊びにすすんで取り組もうとする意欲」や「体の動きを調整する力を身に付ける」「他の児童と仲よく楽しく過ごす」などの資質・能力につながる。



今後の課題

●幼児期の動きの「質の深まり」人との「関係の広がり」の視点をもち、援助と環境(教材)の在り方などの開発や工夫をしていく。

●幼児理解・計画・実践・評価の保育サイクルをもとに、子供園の組織体制を生かしたチーム保育の充実を図る。

●園庭マップの見直しと改善をする。

■御指導いただいた先生

共立女子大学
家政学部 児童学科 教授

田代 幸代先生

■研究に携わった教職員

園長 長：齊藤 志乃
副園長 長：大萩 純子
主査 査：安田 小織

3歳児(うさぎ組)：大萩 純子/小野 幸子
4歳児(くま組)：日下部美紗/加藤 祐子
5歳児(ぞう組)：笹原 咲希/杉田はるみ
保育助手：宮園 文代/小林 明子
黒木 幸枝
看護師：森川 綾子
栄養士：太田 浩美

介助員：高橋 千秋/武居 鈴子
宝川 緑/中塚 由季
村岡 和美/大内 千江
保育補助：向井 淳子/横田志都子
星野 峰子
調理・用務：東都給食株式会社
平成29年度：稲葉美賀子/鎌形 瑞穂

